

万葉の椿

犬 養 孝

椿花咲く

大和の三輪山の西麓にある大神神社は、拜殿のみで、本殿がなく、三輪山そのものを御神体と仰ぐ、古代の信仰をそのままにのこしたところで、こんにちもなお一般の信仰のあつい、大和一の宮といわれるにふさわしいお宮である。世にいわれる“山の辺の道”は、このお宮の前を通過して、三輪山の西裾をぐるっとめぐり、巻向から穴師へと、うねうね屈曲しながら北走している。その巻向に近い檜原社のあたりは、かつては万葉の“三輪の檜原”にあたるどころ、いまは松や杉、それに山野はほとんど果樹園に開拓され、檜の林相など想像もつかないほどである。

檜原社の前の果樹園のあいだには、井寺池といわれる上下二つの池があって、二つの池のあいだの堤防からは、大和三山を一望に見おろし、山の辺の道のなかでも、いちばんの好風である。故川端康成さんは、この地をみずから選ばれて、桜井市の依囀によって、先年、「大和は、国のまほろば たたなづく 青垣 山ごもれる 大和し うるはし」の歌を揮毫され、歌碑が建てられた。その歌碑と二〇メートルもはなれていない池畔に、わたくしの恩師久松潜一先生揮毫になる、万葉歌碑が建てられている。

三諸は 人の守る山 本辺は

馬酔木かしは花咲き 末辺は 椿花つばき咲く

うらぐはし 山そ 泣く児こ守る山

(作者未詳、卷十三—三三三)

という歌である。「三諸」は、神のまつられてあるところで、どこともわからないが、一般には、飛鳥いばすの雷丘かみかかといわれ、また、三輪山ではないかともいわれている。井寺池の水面には、三輪山がすっぽりと影をうつしているし、この歌の「三諸」が三輪山のことであっても、おかしくないような気がしてくる。

「三諸は、人の大切に守る山。麓にはあしびの花が咲くし、頂上の方には、椿の花が咲く。本当にすばらしい山だなあ。泣く児を守るように、人が大切に守る山だ。」

といったような意味だろう。馬酔木と椿の花は、万葉人の、とくに愛した花だ。馬酔木が一〇首、椿は九首の歌をかぞえる。

この歌は一般には右のような意味に解されているが、わたくしには、この歌をうたっていると、なんとも、なつかしく、たのしい揺籃の夢がわいてくる。まだ実証したわけではないからわからないが、わたくしの直観では、わらべ唄、あるいは、子守唄のようなものではなかったかという気がする。かりに、子守唄のようにふしをつけて、

「三諸は、人の守る山、本辺もとべはネエ、あしび花咲き、末辺は、椿花咲くヨ、すばらしい山だ、泣く児守る山、ネンネンヨウ

とでもうたってみると、「三諸」の山が、里人の生活と密着してしまっている度あいも感じられ、愛される花の、アシビと椿が、とくにとり出されてたえられ、簡単、単純な調子のなかに、なつかしい揺籃の香がふっとうかびあがってくるようだ。赤ん坊をおんぶした里の子が、紅い椿の花の小枝を手にして、うたいながら、背なかの子をあやしているような情景さえも、うかんでくるのだ。

この歌の碑の付近の檜原は、三輪山といい、檜原の森といい、水面に映る山影といい、すべて、ひっそりした緑一色の上に、去来する白雲があるばかりだが、見ているうちに悠久の時の流れのなにかわからない「三階」の山と、一輪の真紅の「椿花咲く」小枝と、うた声にかわる、わたくしの檜原の夢も、うそではないように思われてくる。

つばいち

三輪山の西南麓、いまの桜井市金屋の付近には、かつて街路樹として椿が植えられていた。世に古代の市の最初ともいわれる海石榴市である。

この金屋の付近は、古代にすでに四通八達、たくさんの道があつまっていた。北からくる山の辺の道、伊勢、初瀬からの伊勢道、初瀬道、また飛鳥方面からくる磐余の道、山田の道、また西からの道などで、まさに「八十のちまた」が現出していた。したがってここに、はじめて物々交換の市もできたのだ。人の大勢あつまるところだから、ここに街路樹が植えられた。それが椿の木であったから、「海石榴市」と呼ばれたもので、のちの平安時代でも市が盛んであったことは、清少納言の「枕草子」に「市はつばいち」とあることでもわかる。

街路樹といえば「銀座の柳」を思い出すかも知れないが、古代には、ただ緑蔭のためばかりでなく、椿とか橘とかの実用的な木が植えられた。万葉という椿は、一説には、こんにちのサザンカだともいわれるが、まず、こんにちのヤブツバキ（またヤマツバキ）の類をいうものである。万葉ではツバキの用字は、「椿」「海石榴」「都婆吉」「都婆伎」の四通りがつかわれている。椿の木は、実用的には、嫩葉、嫩芽は食用になるし、種子からは油がとれるし、紫草の根からとる紫の染料には、椿の木を焼いた灰をあくとして入れると、よい紫染めができるなど、多くの効用が知られていた。だから、

紫は 灰さすものぞ 海石榴市の

八十のちまたに 逢へる児や誰

(作者未詳、卷十二一三二〇二)

の歌もあるのだ。いまは、金屋の町並はひっそりしていて、「海石榴」の昔も忘れられ、わずかにツバイチ谷という小字と、「椿市観音」という小字に名をとどめ、観音への石の道しるべが街道の傍に、万葉の用字と同じく「海石榴市観音道」として刻まれたのをのこすばかりである。かつては、三輪山麓、初瀬川畔には、街道に植えられた椿に、紅い花も点々と見られる海石榴市があつて、しかも、大神の神の麓ではあり、四方から人の集まりやすいところだけに、この付近の広場では、春秋二季に、青年男女が結婚の機会をもった歌垣も行なわれたのだ。

「業は灰さすものそ……」の歌は、その歌垣のりの、男性の求婚の意をあらわした歌である。古代には、女性にその名を聞くのは、求婚の意志をしめすものであつた。この歌に対して、女性の方は、

たらちねの 母が呼ぶ名を 申さめど

路ゆく人を 誰と知りてか

(作者未詳、卷十二一三二〇二)

と答えている。「道のゆきずりの男性を、誰と認めて答えられるもんですか」と、いちおう拒絶するのが、古代の礼であつて、今日でいえば「考えさせていただきますワ」というところであらう。

椿の花咲く「八十のちまた」の傍で、こんな恋ごころのささやきもかわされていたのである。

つらつら椿

こんにち近鉄の吉野行の電車は、橿原神宮駅から南へ飛鳥・壺阪山などの駅をすぎ、西南に向かって吉野口駅で、国鉄和歌山線と合流する。ここで近鉄は東南へ吉野に向かい国鉄は西南へ五条、和歌山へと向かっている。この吉野口駅を中心とした南北の谷が、巨勢谷である。曾我川の上流にあたり、北の方は谷の幅もひらいているが、南方分水嶺の重坂峠付

近にいたると、谷の幅が、わずか六、七〇メートルの狭さになるところもある。古代に、大和三山に近い飛鳥・藤原京や、北の平城京から紀の国に向かうのには、この巨勢谷を経て、五条から紀和国境のま<sup>ま</sup>つち山を越える。この道は、どうしても通らねばならぬ道筋であった。

吉野口の駅のあるところは、御所市古瀬で、駅のすぐ北の、小字大日に、当時の氏寺の巨勢寺跡があり、今日、塔の基礎をのこしている。重坂峠にいたるこの谷には、今日、ヤツツバキ（ヤマツツバキ）が、たいへん多く自生していて、椿のような暖地性の植物の生育に適したところらしく、椿の生垣さえ見られるほどである。駅の西方山裾に、玉椿山阿<sup>あ</sup>吽<sup>うん</sup>寺という寺があつて、ここでは、椿の木を数多くあつめてゐる。

藤原京の時代に、春日蔵首老<sup>かすがのくらひとやらの</sup>という官人は、紀伊に向かう途中、この巨勢谷で、

河上の列々椿　つらつらに

見れども飽かず　巨勢の春野は

（卷一—五六）

と詠んだ。「つらつら椿つらつらに」の語調のよさは、よく知られてゐるところだ。「つらつら椿」については、いろいろの説があるけれども、かつて故沢瀧久孝博士が「点々と赤くつらなり咲いてゐる椿」の意に解されたのに拠るべきであろう。曾我川上流のつらつら椿を、よくよく見ても見あきないよ、巨勢の春の山野はなんといふことだろう、の意であろう。

藤原宮を出て、吉野口駅のあたりまでは、約二キロ、ほぼ、三時間の道のりである。まだ疲れも出ないし、めずらしい谷あい環境となつて、旅ごころのたのしさにうきたつてゐるような時だ。だからこそ、「つらつらつはきつらつらに」の、うっとりするような陶醉感に充ちた表現をも見るのである。意味としては「つらつらに見れども飽かず」だが、語調としては「つらつらつはきつらつらに」でなければならぬ。その上、四、五句の四三・三四の律動も、うっとり

したたのしさに拍車をかけるようである。わたくしは、ある年の春、川瀬の音ばかりがさらさらときこえるこの谷の奥で、ふとメジロの鳴き声にふりあおいでみると、つらつら椿は、いまを盛りの真紅に輝くようだった。

この歌よりおそらくは後のことと思われるが、大宝元（七〇一）年九月、持統上皇とお孫さんの文武天皇とが、いまの白浜温泉（紀ノ湯、牟婁ノ湯）に、藤原宮から出かけられたとき、おともの坂門人足さかかどりのひとあしという官人が、同じ巨勢谷で、

巨勢山の 列々椿 つらつらに

見つつ偲しのはな 巨勢の春野を

（巻一―五四）

とうたった。これは、もちろん、前の人の歌詞「つらつら椿つらつらに」を意識したもので、おそらく官人らの仲間でも、この語調のよさは評判になっていたものであろう。坂門人足の場合も、巨勢路での旅ごころのたのしさは変りあるまい。そこへ前の人の歌のしらべもよみがえり、いわば現在の旅のたのしさと、前者の春の日のたのしさとが、二重うつしにかさなつての陶酔感となっているのだ。ここがあの「つらつら椿つらつらに」の処だなと思いつつ、いま晩秋で椿など咲いてはいないが、春の日を思いやつてたのしんでいるのだ。四、五句の三四・三四の律動も春の日にあこがれの思いを馳せている姿勢を思わせているようだ。

同じ語句をもういちど使うことなど、個人意識、著作権意識の強い今日からは、盗作といわれるかもしれないところだが、それが平気でつかえるところに、歌が人々の共有財産であったあとをとどめているし、また、後の人がこのようにうたうところに、名所意識のたのしきも見られて、いわゆる「歌枕」のおこつてくる一つの過程をも、見とることができておもしろい。いわばこの二重うつしで、巨勢路の旅ごころは一層はずんでいるのだ。

わたくしは、曾我川が、またげるほどに小さくなるあたりの、狭い谷のしずけさが忘れられないし、つややかな葉と、葉のあいだの真紅の色と、ひびきかえるメジロの声とを忘れることができない。

吉野口から重坂峠を越えて紀和国境のまつち山まで約一六キロ、峠をくだってしばらく歩いた上垣内かみかきというところから、はじめてまつち山の峠が見えはじめるが、そこから約三時間は、あの山越えたら、あの山越えたらと、思いつつ歩いて歩かねばならない。まつち山は旅人たびびとにそのように見える山だから、そこに八首の歌も集中するのだし、これだけ歩いてみると、巨勢谷の「つらつら椿」もいきいきとした旅ごころのたのしきとして、いっそうよみがえってくるのだ。

## 八峯やっほの椿

今日は、椿は観賞植物としてきわめて愛好されているから、園芸品種もたいへん多いが、今日、青森県を自生北限地として、本州南部・四国・九州の暖地にはとくに多く、ヤブツバキ（ヤマツバキ）の類が、列島を覆うているところを見れば、万葉でいう椿もほとんどこの類であつたと思われる。今日も、あまり高くない山の峰々の日だまりなどに、つややかな葉に真紅の花をつけたヤブツバキを見ることが多い。

あしひきの 山海石榴やまうしほ咲く 八峯やっほ越え

鹿比待つ君が 齋いはひ妻かも

（作者未詳、巻七一―二六）

の歌の「山椿咲く八峯」というのも、そうした景観であつたろう。「倭名抄」に、椿を豆波岐まななづきとよむとして、「海石榴」は和名はつばきだとしている。さきに出た「つばいち」も「海石榴市」と書かれている。この「あしひきの」の歌は「狩に出た夫のために、潔斎して家で無事を祈る妻」の心ともとれるし「夫が外出がちで、家に閉じこめられ、留守番ばかりさせられている妻の恨み心」ともとれるし「留守番をしている他人の妻に言いよる男が、ことわられてのすてはちの言葉」ともとられ、いろいろの解釈がされている。いずれとも決めたいが、「あしひきの 山つばき咲く 八峯越え 鹿比待つ君」の語には、農山村の生活のにおいが、ゆたかなのはまちがない。あの峰、この峰にひっそりと、赤い椿の咲く

日だまりなどに、鹿もあらわれて来そうである。

万葉の椿は、初期の万葉に出てくるばかりでなく、末期の、大伴家持の歌にも、とくにこの「八峯の椿」がよまれている。

天平勝宝二（七五〇）年三月三日に、当時越中守として、いまの富山県高岡市伏木町の勝興寺のあたりの国庁に赴任していた大伴家持が、国守の館での宴会のとき、よんだ歌に、

奥山の 八峯の海石榴 つばらかに

今日は暮さね ますらをのとも

（卷十九—四一五二）

というのがある。国庁の西方には、二上山の山塊があつて、いくつもの尾根をつらねているし、「奥山の八峯の椿」は、時々家持の目にするところでもあつたろう。この歌では「存分に心ゆくまで（つばらかに）たのしくすごしてください、みなさんよ」というのが、中心の気持であつて、その「つばらかに」の語をひき出すために「八峯のつばきつばらかに」といつているのだ。一見、音調をととのえるための「つばき」に過ぎないようだが「奥山の八峯の椿」は、宴席をめたく清潔にひきしめる呼吸にもかなつてゐるし、宴席の花たてに「八峯の椿」が活けられていたかも知れないのである。

家持が、大和にも同じ名のある越中の二上山に朝夕したしんだことは、多くの歌でわかるが、同じ天平勝宝二年四月三日、もと越中において今は越前に転任している官人の、大伴池主に贈つた長歌のなかにも、

……明け来れば 出で立ち向かひ 夕されば ふりさけ見つつ 思ひ延べ

見和ぎし山に 八峯には 霞たなびき 谷辺には 海石榴花咲き……

（卷十九—四一七七）

とあつて、朝夕、ながめては氣を晴らし、なぐさめとしていた二上山の、峰々にたなびく霞や谷辺の椿の花に、心をよせている実状もわかるようだ。



家持が、越中守の任を終えて上京してから七年目の、天平勝宝九（七五七）年三月四日、大原今城おほはらのいまきという者の家で宴会があつたときには、

あしひきの 八峯やちほの都婆吉つぽきち つらつらに

見とも飽かめや 植ゑてける君

（卷二十一 四四八二）

とうたっている。この歌の左注に、家持が、「植ゑたる椿に属けて作る」とあるから、今城の家の庭には、椿の木が植ゑられていたことがわかる。やはり、今日と同じように、庭に椿、しかもどこかの八峯やちほの椿が植ゑられ、その上、黄いろいしべもあざやかに真紅の花をつけていて、宴えんの興きようを添そえていたことであろう。「八峯のつばきつらつらに」は、前の歌のように、音調のためであることはいうまでもないが、前に述べた「列々つらつら椿つらつらに見れども飽かず……」の名歌が回想されているのにちがいない。「この椿を植ゑたあなたという方は、見あきない方だ」と、如才なく主催者側をほめているのだ。

越中二上山の尾根を歩いてみると、東方の越中平野、西方、氷見の布勢ふせの水海跡みづうみあとへと、遠く尾裾をひいて、まさにゆたかな「八峯」を実感としてつかむことができる。家持の歌に「八峯のつばき」の多いのも、越中での体験によるところかと思われる。

### 片 山 椿

椿の木は、もともと、葉は厚く照り輝き、花は高貴な真紅の色で、常緑喬木として、生命力にあふれた呪的植物と考えられていた。椿はすでに、『古事記』や『日本書紀』にも見え、たとえば、『古事記』のなかでは、仁徳天皇の皇后石之日いしのひ売うが、天皇をほめてうたった歌と伝えるものの一節に、

……葉は広ひろ 齋うつ真ま椿つばき 其しが花はなの 照しり坐ますは 大お君きみろかも

とあって、葉を「齋うつ（神聖な）真ま椿つばき」とたたえ、「椿の花のように照り輝いていらっしやり、その葉のように、ゆつたりとしていらっしやるのは、わたしの夫君でいらっしやるよ」とほめたたえているし、同様の表現は、雄略天皇の条にも見える。椿が生命力に充ち、貴ばれるのは、後世、椿神社、椿の宮、椿寺など、各所に見られるのもわかる。

また、たいせつな妻にもたとえられていることは、文武天皇が、難波宮に行幸されたとき、天武天皇の皇子の長皇子ながみちのよんだ歌に、

吾わが妹いも子こを 早はやみ浜はま風かぜ 大おほ和わなる

わを松まつ椿つばき 吹まかざるなゆめ

(卷一七三)

とあるのもわかる。「わが妻を、早く見たいと思う早く、吹く浜風よ、大和にいる、わたしを待っている椿を、吹かないことのないように、きつと吹いてくれ」という心をうたっているのは、いとしい、なつかしい、だいたいな妻を、椿でたとえているわけで、椿が賞ばれたよい証拠だし、長皇子のお庭にも、椿があって、日ごろ愛賞されていたのかも知れないのだ。

こんにち、農村の田舎などにゆくと、家の門のきわが山手になっていて、そこに真赤な花の咲いた椿の木を見ることがある。これが「片山椿かたやまつばき」だ。天平勝宝七（七五五）年に防人交替のあったとき、武蔵の国荏原郡にほんのり（東京都の大田区・品川区など、もとの荏原区）出身の防人の物部広足ものべひろあしという者は、

わが門かどの 可か多た夜や麻ま都つ婆は吉よし まこと汝なれ

わが手触れなな 地ちに落ちもかも

(卷二十一四四一八)

とうたった。〃わしのうちの門の、片山椿よ。ほんとにお前、わしの手が触れないうちに、大地に落ちてしまうのだからよ。〃といった意味である。「触れなな」というのは、東国の方言で「触れないで」の意で、「落ちも」の「も」は、普通にいえば「落ちむ」というところである。

この「片山椿」も、自分が郷里でなによりも愛している女人をたとえたもので、いう心は、自分のいない留守に、他人にとられてしまはいはしないかという不安の気持であろう。ここでも「片山椿」は、あこがれのまどにたとえられているし、郷里の家の「片山椿」が、日ごろ、きわめて愛されていたことも、語っている。

椿の花は「落ち椿」といわれるように、もつくりと、そのままの形で、大地の上に落ちてしている。この歌では「落ち椿」が、なんと実感と実状とを踏まえてとらえられていることだろうか。「地に落ち」る姿を、「わが手触れなな」とは、木に咲く赤い花が、そっくりそのまま、大地にある実状をいい得ている。わたくしは、万葉の椿を語ってきて、東国の一防人によって、「落ち椿」の美しさ、惜しさが、千二百余年の時を越え、いま新たに、さりげなく、うち出されていることにしみじみ感慨を深くするのである。

(季刊「アニメ」より)